

社会的な家庭支援必要

集団暴行考えるシンポ



（左から）元児童相談所長 堀花鷹志さん、元児童相談所長 山内優子さん、前北谷町立中学校校長の富底正得さん、同町青少年支援センター所長の河上親彦さん、スクールカウンセラーの崎原林子さんら5人が報告。

非行・育児放棄に経済的要因

現状と課題を報告

うるま市で起こった集団暴行事件をきっかけに県内の子どもたちの状況を考える緊急集会「誰がこの子らを救うのか？」（主催・第55回子どもを守る文化会議・沖縄集会実行委員会）が9日、うるま市民芸術劇場で開かれ、教育や福祉関係者を中心に約250人が参加。県内で多い非行や育児放棄の背景には貧困があり、社会的に家庭を支える仕組みが必要なることを確認した。

（12日付教育面に詳報）

パネリストとして、元那覇保護観察所所長の堀花鷹志さん、元児童相談所所長の山内優子さん、前北谷町立中学校校長の富底正得さん、同町青少年支援センター所長の河上親彦さん、スクールカウンセラーの崎原林子さんら5人が報告。

堀花さんは、非行や集団暴行に走る子どもたちの心

シンポジウムで、子どもたちの現状と課題を報告するパネリストの（左から）堀花鷹志さん、山内優子さん、富底正得さん、河上親彦さん、崎原林子さんら9日、うるま市民芸術劇場

（12日付教育面に詳報）

理を紹介。「いじめは、大人が見ようと思わないと見えない。教師は子どもたちと会話ができるようにしてほしい」と説明。

山内さんは「県内見相には、常に虐待相談が全国のは2倍、非行が3倍ある。しかし、職員数が全国に比べ圧倒的に少なく、十分対応できていない」と説明。非

行の背後には育児放棄があり、背景には貧困があると、学校や児相だけでは解決できないほど状況は厳しいとした。

富底さんと河上さんは、2003年に北谷町で暴行

事件が起きた後に、教師や行政、民生委員らが数人一組で、支援が必要な親や子どもを援助した取り組みを紹介。同制度は継続中だが、意識が弱まっていると課題を挙げた。

20年近く子どもの悲しみを感じてきた崎原さんは、「沖縄の子どもたちは悲鳴を上げている。貧困にある親は夜働かなければならず、仕事で疲れ、子どもを

ケアしたくてもできない。子どもを支援するシステムをつくらなければならぬ」と訴えた。

実行委はシンポで出た意見や議論をまとめ、今月中にも県に、抜本的対策を求める要望を提出する方針。